

口唇口蓋裂患者の研究模型における咬合評価法と頭部X線規格写真における顎顔面形態との相関関係の解析に基づく咬合評価法による成長予測能の検討

【はじめに】

口唇裂口蓋裂を有する患者さんに対して、形成外科・口腔外科・耳鼻咽喉科医が口唇や口蓋の形成手術を行っています。本院口蓋裂診療チームでは十分な管理の下、長年積み重ねられてきた臨床経験に基づいて形成手術を施行し、一定の成績を納めてきています。この20年間に於いてヨーロッパ諸国を中心に各施設において、術者に左右されずに一定の水準に達する手術法はないかと比較研究が行われています。審美性に優れ、言語の十分な機能が得られ、成人期に外科的顎矯正治療をしないでよい顎顔面領域の劣成長をもたらさない手術法の選択を行っています。我々も本院で行われた治療結果が世界的にどの水準にあるのか、咬合状態ならびに顎顔面形態がどうであったのか、またそれらが相互にどのような関係にあるのかを評価する必要があると考えました。

【対象】

1966年4月1日～1993年3月31日の間に、九州大学病院口蓋裂チームで口唇裂・口蓋裂の初回手術を受けた片側性唇顎口蓋裂の患者さんで、5歳と10歳時に咬合模型を作製し、また5歳と10歳ならびに15歳以上で頭部X線規格写真を撮影した85名の方です。対象者となることを希望されない方は下記連絡先の鈴木陽まで連絡ください。

【研究内容】

各患者さんの5歳と10歳時の咬合状態の良否を5段階に判定し、顎顔面領域の成長との相関関係を検討し、成人期までの顎顔面の成長の評価と関連性があるか、すなわち成人期における外科的顎矯正治療の必要性を予測できるかを検討します。

【患者さんの個人情報の管理について】

対象者の抽出時に、氏名、年齢、性別、手術歴を調べますが、石膏模型の評価や頭部X線規格写真の計測以降は全ての段階で個人識別は登録番号で分別されており、個人識別は全くできません。個人と登録番号の対応表はコンピュータ外に取り出されて保管されていません。本研究の実施過程および結果の公開(学会発表や論文)では、評価または計測された数値のみが対象となり、患者さんを特定できる情報は一切含まれません。

【研究期間】

平成24年10月24日～平成24年10月31日

【医学上の貢献度】

口唇・口蓋裂患者さんに対する形成手術に対して、術後・成長後の咬合状態・顎顔面形態・言語成績・審美性・治療に対する満足度等さまざまな角度から評価を行い、よりよい手術方法の選別・確立を行うことに寄与すると考えます。

【研究機関】

九州大学大学院歯学研究院口腔顎顔面外科学分野

准教授・竹之下康治(責任者)

分担者：九州大学病院矯正歯科・講師・鈴木 陽

九州大学病院顔面口腔外科・講師・窪田泰孝

九州大学病院顎口腔外科・准助教・笹栗正明

連絡先：〒812-8582

福岡市東区馬出3-1-1

電話：092-642-6460（平日 8:30～17:00）

E-mail：suzuki@dent.kyushu-u.ac.jp

担当者：鈴木 陽

